The Pacific Society

太平洋人物誌

田中鶴吉

東洋の小ロビンソン

（1855 — 1925）

田中鶴吉は幕臣・田中右馬之允の長男として安政二年、江戸麻布の狸穴に生まれた。幼少のときから堅意地なところがあり、両親も持て余していたが、慶応元年（一八六五）十一歳のとき、自ら出奔して横浜の外人商館にボーイとして住み込んだ。

オーストラリアに上陸

ここに訪れてきた客人のうちに「ウキーリモン」（Willymon ?）という米国商船の船長がおり、鶴吉は米国に連れていってくれるよう頼んだところ、オーストラリア大陸に寄ってからなら米国本土へ向かうが「それでよければ…」と承諾をえた。鶴吉はオーストラリアがどこにあるのかさえ知らなかったが、船長のボーイとして乗り組むことにした、という。

本人の記憶によると、シドニー、メルボルンなどに上陸したが、その時期はおそらく慶応二～三年（一八六六～七）であろう。オーストラリアに残された日本人の足跡としては、古い方に属する。

その後なお一～二年、ボーイを勤めているうち、慶応三～四年（一八六七～六八）サンフランシスコに入港する機会をえた。鶴吉は、かねてからの希望に従い、船長の許しをえて、バック・アンド・ヘッド製靴会社の社長宅にボーイに雇われ、月給二〇ドルを貰うようになった。

製塩会社に無報酬で勤務

明治四年（一八七一）、岩倉具視らが欧米に派遣されてサンフランシスコに立ち寄った際、鶴吉は岩倉の訓示を（直接に？）聞いた。「身に一技一能あらば本国に立ち帰るべし」の言葉に感奮した鶴吉は、サンフランシスコに近いロックアイランドに出来た製塩会社に勤めることを思い立った。この会社は、燃料をあまり使用しない天日法による製塩法で特許をえたパートンが設立した会社で、鶴吉はこの製塩技術を修得して帰国しようと考えたのである。ところがパートン社長は、技術の盗まれることを警戒して、その取扱いは熟練を要すると称して拒絶した。

そこで鶴吉は、無賃金労働と秘密厳守を条件として、ようやく入社を許された。その保証としては、当時の日本名誉領事ブルックの力添えもあったらしい。無報酬だから、それまで貯えてあった七〇〇ドルも三カ年で失ったが、四年目からは若干の賃金を与えられるようになり、明治十二年には月給八〇ドルを受けていた。

日本で製塩業の勧め

そこに転機がきた。前田喜代松という日本人が尋ねてきたからである。喜代松は東京で牧牛を試み、牛乳店を開いた先駆者で、さらに牧畜業の拡大を図ろうと、その視察に渡米したところ田中鶴吉のことを聞いた。二人は意気投合して、喜代松は鶴吉に日本内地で製塩業を興すことを勧めた。鶴吉はこれに従うことになり、帰国に当たって、かつては警戒されたパートンからも一種の証書をもらった。

「当地ニ於テ製塩方法ヲ伝習ノ為、三箇年間無給料ニテ勉強シ、別ニ四ケ年間、前後合セテ満七ケ年間、該業ニ従事シ、十分ソノ精製ノ方法ヲ熟知セリ」との文面のもので、さらにサンフランシスコ駐在日本領事・柳谷謙太郎からも「田中鶴吉、多年当地製塩所ニ在テ製塩ノ研究ヲナシタルコト、拙者親シク聞見スル所ナリ」と保証状を添えてくれた。

喜代松は鶴吉を通訳として、米国各地の牧場を視察して帰国したが、喜代松は牧牛の事業は一生の仕事で、あえて急ぐにあたらないが、製塩事業は一日も早く着手させたいとして、出資者を募った。ところが、何よりも製塩の実際を示すことを求められ、東京深川地先に試験所を設けることになった。二〇町歩（約二〇万平方メートル）を借受け鶴吉が監督して建設に当たり、いよいよ製塩にとりかかろうという矢先、南風と激浪が押し寄せ、一夜のうちに跡を止めず施設を破壊してしまった。

喜代松は全国の適地捜しを鶴吉に勧め、資金を再び出した。鶴吉は千葉、茨城、宮城から愛知、三重、徳島の各県を歩いたが、結局、天然の乾燥地でなければ天日法が不適当であることを改めて知った。帰途、旅費も乏しくなり、芋畑の芋を食って警察の厄介になりながら、喜代松宅に帰ってきたのが、明治十四年三月頃であった。

小笠原諸島でまず牧畜

ここに至って、鶴吉は時節を待つため転業を喜代松に申し出たが、喜代松は当時政府が開拓の力を注いでいた小笠原諸島に着目していた。気候温暖で緑草の絶えることのないこと、併せて海洋に囲まれていることは動物の逃亡を防ぐから、天然の牧場となりうるとの判断であった。牛羊放飼の素地をつくったうえ、製塩の適地を求めたらどうか、という提案であった。

東京府勧業課に出願したところ、前例がないとして却下され、改めて府知事・松田道之に嘆願して、拝借願を出すようにとの内諾をえた。鶴吉は、明治十四年六月、単独で同諸島に渡り、調査に当たった結果、嫁島が製塩に適地であることを見定めた。

小笠原諸島は、明治八年内務省の所属となり、父島に小笠原事務所をおい

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

て経営に乗り出したが、明治十三年十一月、所管は内務省から東京府に移された。したがって、鶴吉が調査におもむいた頃は、東京府の経営もまだ端緒についたばかりであった。

明治十九年一月十五日から二月十二日号にわたり『時事新報』は、無人島での籠城生活を評して「東洋の小ロビンソン・クルーソー」と称え、本人の談話をまとめた記事を連載した。この記事によると同島を選択するに際して——（新かなづかいに直す）

「田中一人、同島に渡航し十数日間、彼地此地巡航なし、なお船便のなき処は土人を雇い独木船に打乗りて近傍四、五十里が間は残る隈なく穿索せしに、思いしよりも土地柄良く、特にこれまで人跡の届かぬ土地にて風土良く生草繁茂し、山高からず谷深からず牧場に恰好して、しかも南向の平面地に製塩には極めて適度な処あり」

との理由によったのである。

同明治十四年九月上旬、鶴吉は一人嫁島に乗り込むことになった。種牛五頭、豚二〇頭、鶏五〇羽のうち、豚一五頭が船中で病死した。このほか、生活必需品として米麦、大豆、小豆の数俵、斧、鋸その他二、三の大工道具に麻縄、細引、さらに「無人島の籠城に欠くべからざる鳥銃一挺、燃草、燧石一具」を携えていた。

滞島中の米麦は、喜代松が仕送りに当たったが、その運賃については東京風帆船会社社長・遠武秀行の特別な配慮を受けたという。

明治十八年に初めて刊された日本海軍水路部の『日本水路誌』の第二改版（大正三年刊）は、嫁島の項を次のとおり解説している。

「聟島列島の最南島ニシテ媒島ノ南方約七浬ニ在リ、一ニ栄次ケ島ト曰イ一島二嶼ヨリ成ル。全島樹木尠ク雑草生長ス。○住民ハ泉水ヲ用ウレドモ其ノ量極メテ尠ク、水質モ亦不良ナリ○島周ハ多ク岩崖絶壁ニシテ島ノ南部両側ニ小浜アリ○人口五（明治四十三年十二月調）アリ、牧蓄ヲ業トス」

鶴吉が無人島生活を営んだ時代と異なるのは人口だけで、その状況は同じと考えられるので、鶴吉が相当な困難に出会ったであろうことは、これで容易に推察できる。

ついでにいえば、山方石之助『小笠原島志』（明治三十九年刊）では、

「嫁島は……全島禿兀、樹木なく、萱葭蕃生して水乏し、且つ沿岸概ね絶壁にして寄航太だ難し。明治十二年中父島の住民、西浜栄次暴風にあひ、兄島よりこの島に漂着せしより又栄次ケ島と称す。目下、島内に牧場を設け、牛豕野羊の類、大いに繁殖すといふ」

と、牧畜は細々と続いたらしい。

協力者が逃げ出す

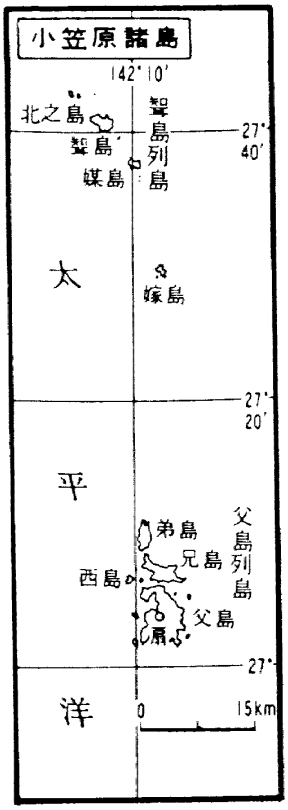
最初の無人島生活は明治十五年六月の帰京までであった。同年十一月、鶴吉は定期の風帆船で戻った。このとき、元三菱商船学校の生徒だった信州人、二十二歳の青年を助手として連れ帰った。また東京府から洋牛二頭、綿羊五〇頭の貸与を受けた。ところが、翌十七年二月青年が突然東京に帰ってきた。後援者である喜代松が糺したところ、鶴吉のあまりにも命知らずな豪胆さに恐れをなしたためであった。

鶴吉はその後、聟島、媒島の二島に牛羊を拡げ、さらに姉島、妹島、姪島（いずれも聟島列島内）にも移して繁殖が進んだ。鶴吉は〝六島国の王〟になったようであった。それだけの人手が必要と考えた喜代松は、賭博犯で刑期の終わって改心したいという上総の男を送ったが、これまた半年で父島へ逃げ出してしまった。無人島生活の苦しさと、鶴吉の辛苦がわかろうという経過であった。

とはいえ、牧畜については一応の成果をみて、念願の製塩試験場を父島に設ける計画が進んだ。また政府にあっても、留置監の囚人をこの作業に当てようとする施策が推された。しかし、実際の製塩に手を伸ばすことは、なお多額の投資が必要であろうと判断された。明治十八年も押し迫って、東京に帰った鶴吉は、福沢諭吉の勧めもあって、再度アメリカへ調査の旅に出ることになった。

再渡米したのは明治二十年で、有名人となった鶴吉には、井上角五郎、塚本松之助といった実業人の後援も加わった。しかし、鶴吉も自らの生活安定を考えたらしい。調査の終わらないうちサンフランシスコのオフューム劇場の会計助手となり、そのまま三〇年余り働きつづけ、日本人との交渉も避けた。結婚して四女をもうけ、大正十四年、七十六歳で歿した。

青年時代の貴重な時間を費しての製塩技術習得ではあったが、遂に日本での事業は成就できなかった。「東洋の小ロビンソン」との称をえたとはいえ、小説のロビンソン・クルーソーと同様な運命をたどらざるをえなかった。



〔参考文献〕
Oyabe, Jen'ichiro "Japanese Robinson Cruso" 1898, Boston
山田毅一『南進策と小笠原群島』大正五年、放天義塾
田村栄太郎『日本の技術者』昭和十八年、興亜書房
加藤新一編『米国日系人百年史』昭和三十六年、新日米新聞社

〔松永　秀夫〕

NII-Electronic Library Service